

アルファルファ牧草地における除草法

有馬典男・*押川 晶・緒方良治 (宮崎県畜産試験場・*西諸県農林振興局)

Norio ARIMA, Akira OSHIKAWA and Yoshiharu OGATA :
Weeding of Alfalfa Pasture

アルファルファの栽培を行う上で、雑草の抑制、防除は生産性を維持させて行く上で重要である。

そこで、アルファルファ生育初期の冬雑草、主にナズナやハコベなどの防除に効果が高いとされている、早播き・年内刈取り法と、夏雑草、主にメヒシバやイヌビエに対して2種類除草剤の使用を行い宮崎県における年間のアルファルファ収量にどのような影響を与えるかを調査する目的で、この試験を行った。

1. 試験方法

供試品種としてタチワカバを用い、播種を早播き刈取処理区が1988年9月10日、その他の区が1988年9月30日に行った。栽培基準は系統適応性検定試験に準じて行った。刈取処理は1988年11月11日に、薬剤散布は'89年5月9日に行い、'89年3月下旬から9月下旬にかけて、6回刈取り調査を行った。

2. 結果及び考察

第1表に乾物収量の推移を示した。

1番～6番草通じてのアルファルファ・雑草の乾物重、その比率については、各処理間に有意な差はみられなかった。

早播き刈取処理の冬雑草への効果を見るために、1番～3番草について検討を行った。3回刈の雑草重の合計

は、早播き刈取処理区が5.4kg、無処理区が12.7kgと早播き刈取処理の雑草重は無処理区に比べて低かったが、統計的に有意な差ではなかった。

除草剤の効果を見るために、除草剤散布以降の3番～6番草について検討を行った。4回刈の雑草重の合計は、ナブ乳剤区(セトキシジム系)が12.8kg、クサガード水和剤区(アロキシジム系)が17.1kg、無処理区が27.8kgと差がみられた。アルファルファと雑草の比率についてみると、ナブ乳剤区に1%、クサガード水和剤区に5%水準で無処理に対して有意な差が認められた。

以上のように、統計的に有意な効果が確認できたのは除草剤による雑草割合の低下のみであった。

しかしながら、早播き刈取法についても、本県に適した時期に刈取などの処理を行うことで、高い効果が得られるものと推察されるため、今後、処理時期の検討を重ねて行く必要があると考える。また、除草剤と、早播き刈取法を組合せて、年間を通じた、より効果の高い除草法の検討、そして、早播き刈取法の処理時期だけでなく、除草剤の散布時期についても、より高い効果を目指して、検討を重ねて行く必要があると考える。

第1表 除草法別の乾物収量

(kg/a)

刈り取り日		3/23	4/26	6/6	7/6	8/8	9/29	合計
ナブ乳剤	アルファルファ	20.3	31.2	19.7	20.2	24.6	13.6	129.6
	雑草	8.5	2.5	2.2	0.8	1.6	8.2	23.8
	*	41.9	8.0	11.2	4.0	6.5	60.3	18.4
クサガード	アルファルファ	24.8	32.9	18.6	20.1	17.7	11.9	126.0
	雑草	7.0	1.6	1.3	1.2	4.9	9.7	25.7
	*	28.2	4.9	7.0	6.0	27.7	81.5	20.4
早播き刈取	アルファルファ	28.5	34.0	22.8	19.8	20.0	10.8	135.9
	雑草	3.2	1.0	1.2	2.9	5.9	15.4	29.6
	*	11.2	2.9	5.3	14.6	29.5	142.6	21.8
無処理	アルファルファ	23.3	32.6	21.3	20.5	18.6	9.7	126.0
	雑草	8.0	2.3	2.4	1.5	6.0	17.9	38.1
	*	34.3	7.1	11.3	7.3	32.3	184.5	30.2

注)*:雑草/アルファルファ×100